

他者化された者たちの交差 —源静夫「焼土の女」の女性たち— Crossing Marginalized people: Women in Shizuo Minamoto's "The Woman of Scorched earth"

佐久本 佳奈

SAKUMOTO KANA

一橋大学大学院言語社会研究科

Hitotsubashi University, Graduate School of Language and Society

キーワード

沖縄文学 ハンセン病文学 女性解放 非琉球人 法と文学

Keywords

Okinawa literature; Hansen's disease literature; women's liberation; Non-Ryukyuan; law and literature

Quadrante, No.21 (2019), pp.95-99.

目次

はじめに

1. 共通項としての「女性」

2. 女たちの「安全な」親密さ

おわりに

はじめに

本稿では、ハンセン病療養所沖縄愛楽園の機関誌に掲載された小説作品を取り上げ、戦後沖縄のハンセン病患者や女性の位相を、「非琉球人」管理体制と関わらせながら考察したい。

『愛楽』は沖縄愛楽園¹自治会によって1954年から1976年37号まで発行された機関誌である。機関誌の性格として、桑畑洋一郎は、「病者と職員との議論が行われ提示される場であった療養所機関誌は、他の療養所も含めて療養所外にも届けられていた」ことから、病者にとって機関誌が療養所内外を通じた「生活実践」、自治の場であったと述べるが²、機関誌が届けられる先として、他地

域の療養所以外のルートはよくわかっていない。

しかし機関誌が沖縄を含めた療養所の「外部」で読まれ、病を理解してもらう契機となつてほしいという病者たちの声は所々に見られる³。

本稿で取り上げる源静夫「焼土の女」(『愛楽』6号、1957年7月⁴)もまた、ハンセン病患者をめぐる問題を療養所の外へと訴え、かつ啓蒙的な主題を提起しているといえる。機関誌に掲載された小説作品は18篇(作家は12人)と数は少ないが、病を抱えた男性の主人公が自死していく作品が多い中、「焼土の女」は女性を主人公に据え「女性の権利」を語らせた点で異色であったといえる⁵。

³ 琉球大学附属図書館の1957年現在の『琉球郷土資料目録』には南静園(宮古島)で発行されていた機関誌『南静』、1965年現在の同目録には機関誌『愛楽』が入っている。療養所外の読者に向けた希望は以下のような文章に見られる。「小説がどんな風に読まれ、どのような批判が持たれているか、現在の所あまりよく解らない。「沖縄のハ氏病」を小誌を通して、多少なりとも知る事が出来ると考えているけれども、どの面からも、批判、叱声意見等反響の起らないのは詫びしい」(『愛楽』通巻8号「編集後記」、1957年12月)。

⁴ 沖縄愛楽園文化部編集、1957年7月10日発行。作品の引用頁数は引用箇所末尾に付す。

⁵ 機関誌『愛楽』の文学作品に触れた先行研究として、大城貞俊「機関紙『愛楽』に登場する表現者たち——「沖縄ハンセン病文学」研究」(『琉球大学言語文化論叢』8号、2011年)がある。

¹ 愛楽園はハンセン病患者自身が1937年に開所した沖縄MTL相談所を前身とし、1938年、県に移管され「国頭愛楽園」となった。1941年に国に移管され、1952年に沖縄愛楽園となった。

² 桑畑洋一郎『ハンセン病患者の生活実践に関する研究』(風間書房、2013年)191頁。



「自らの体験あるいは見聞した事柄を明確な方法や文学的態度を持ちえないままに小説化した⁶」といわれるような同時代の沖縄の文学状況下で、山田みどり「ふるさと」(『うるま春秋』1950年5月)、亀谷千鶴子「すみれ匂う」(『うるま春秋』1950年6・7月合併号)などの女性の書き手による小説において、戦後を生きる女性の自由は、いったん夢見られはするものの、前近代的な地方村落の因習の中で、もしくはアメリカと沖縄の男性共同体の間で潰えていくものだったとすれば⁷、「焼土の女」にはそのような失望感はどこか希薄である。先に挙げた二つの作品と異なり、女性を孤立させずに終わるこの作品は、療養所外に広がる社会への希望として読みうる側面がある。

源静夫「焼土の女」の梗概は以下の通りである。伊波由美子は昭和19年、29歳のとき沖縄に駐屯していた日本軍によって強制的に愛楽園に収容させられるが、その後の戦争で娘以外の家族を全員亡くしている。それから10年後、戸籍申告を済ませた際に、自分の所有であった土地財産が戦争による土地台帳の消失を機に他人名義になっているのを知り、村の役所を訪ねその真偽を確かめる。親族にあたる與昌は、由美子の土地を売り払い、住居の焼け跡に小屋を建てて他人に貸していた。区長と助役は由美子の側に正当性を認めるが、與昌は聞き入れない。一時帰省のための外出許可証を療養所から出してもらうのは簡単なことではなく、由美子は話し合いを出来るだけ早く済ませたいと考える。由美子の土地の上に部屋を借りて住んでいるのは、夫と離縁して一人で子育てをしている嶺井よし子であった。自らの境遇を語り合ったその晩、病気から子供を恐れる由美子のために子供を母に預けたよし子は、由美子を家に泊める。

1. 共通項としての「女性」

テキストは、伊波由美子と親族の與昌、そして嶺井よし子とその夫という男女が対立する構図を際立たせることで、弱い立場にある二人の女性を結びつける⁸。由美子は、療養所にいる間に土地財産を親族の青年にのっとられ⁹、一方よし子は、浮気した夫と離婚し、娘を育てながら貧しい生活を送る。傷ついた女性たちが互いを慰め合う姿は、「女の基本的な人権は有名無実、認められてないんじゃないか」[42頁]というテキスト終盤に吐露される由美子の心情を支える。それだけでなく、結末において由美子は、「社会生活の息苦しい立場に同情はしたけれど、どんなに苦しくとも、愛する郷里で永遠に暮らしゆく健康者は幸福だと〔中略〕羨望していた。だが、よし子には経済的に苦しい立場を通り越して、離婚事情に新たな苦もんがあることを由美子は知った」[42頁]というように、病者と「健康者」の「息苦し」さに差異があることを認めつつ、「女の権利」が奪われているという点で「新たな苦もん」を共有し始めようとしている。

作品が療養所内の読者に向けて、戸籍申告¹⁰を推進する効果を持ったかどうかは定かではないが、由美子は例えば以下の様に、與昌に対して理路整然と、自己の権利を主張する。「貴方達は役場にあった戦前の、私の戸籍と土地台帳等が焼けたのを、

⁸ 由美子の母は存命しているが、当家を離縁したため、與昌の横行を申し立てる権利を持っていないという設定である。

⁹ 松並一路「患者の財産保護法の制定を望む」(『愛楽』13号、1959年6月)では、2、3年の間に起きた、「自己の存在を秘密にしている」という「弱身につけ込んで、病者の財産を乗っ取る者」を3例挙げ、それらを厳罰しそのうえで財産権をもと通りにする法律の制定を望んでいる。

¹⁰ 援護法の沖縄適用を機に制定された戸籍整備法(1953年)は愛楽園入所者も対象となり、親族に届け出の義務があった。しかし戸籍申告締切間際に、何とか戸籍申告をしないで済ませることはできないかと話し込む入所者たちの様子が『愛楽』1号に掲載されている。——「彼らの多くは戦後9年間も本籍地の仮戸籍から除外されていたので、彼らも戦争で死亡或は行方不明になったことにされてしまい、各々の家人によって既に処理され、今では周囲は勿論、親戚の者からさえも、全く忘れられているとの事であった。」(下村英視、鈴木陽子、嘉数睦「「病む」ことにおける人間の存在論的位相」『沖縄大学地域研究』16号、2015年、7頁。)

⁶ 岡本恵徳『現代文学にみる沖縄の自画像』(高文研、1996年)14頁。

⁷ 宮城公子「暴力の表象と沖縄文学の「戦後」一九五〇年代をめぐって」『継続する植民地主義』(青弓社、2005年)参照。ほか、仲村渠麻美「新垣美登子「未亡人」論——1950年代沖縄の新聞における「戦争未亡人」表象をめぐる抗争——」『琉球アジア社会文化研究』第14号(琉球アジア社会文化研究会、2011年)も参照。

面白がつて世間の目を、ごまかそうとするけど、それは許されないことよ。昭和十九年入園当時役場から貰った、私の戸籍抄本はちやんと園の事務所に、今、保管されているわ。それによって昨年（一九五四年）の戸籍申告も済ましたのよ。これから土地所有権も正しく判明するものと信じているわ。人間は何事も正直にやらねば後の日に大変するのよ。」〔35 頁〕

敗戦直後から 1950 年代にかけて、ハンセン病患者たちが書いた文章の中にはジャンルを問わず「人間」の一語が頻出したと荒井裕樹は述べる。それはハンセン病患者に限らず当時の言説空間に頻出したものであったが、「基本的人権の尊重」を掲げた新憲法の登場は、ハンセン病患者たちにも絶大な影響を与え、この憲法の存在が原動力となり、「人間回復」の掛け声のもとに患者運動が始まっていく¹¹。また、強制隔離と懲戒権を明記し「軽快退所」を欠いた「らい予防法」（1953 年）は、沖縄では少し遅れて 1955 年の琉球政府社会局作成の法案によって無批判に、あるいは「らい予防法」にすら保障されていた福祉条項を削除されたかたちで踏襲されようとしていた。これに抗して愛楽園や南静園の入園者自治会では入所者法案が作成されている¹²。由美子が法を盾に闘う姿には、「病者は病者の立場から権利を主張して民主的な世界への道筋を示すべきである」という主張がしばしばなされていた 1950～1960 年代の「療養文芸」の潮流¹³の影響がみてとれる。しかしそれは「療養文芸」に固有の状況に閉じず、同時代の米国統治下の沖縄においてようやく新民法が施行され女性が相続権等を獲得した状況とも不可分ではないだろう¹⁴。テキストは療養所内の読者に向けられ

ただけでなく、療養所の外において、「ようやく人間に昇格した¹⁵」女性たちにも届けられるように書かれていたはずである。

しかし嶺井よし子と離婚した夫は、「隣の A 町、X 料亭の女給」の「美しい女」を選んだという筋書きになっており、「性的強情」などという言葉で悪魔化されるその女性が、「大島の女」「みどり」である。「みどり」は、よし子の言葉によって表現されるのみであり、彼女自身が言葉を発することはない。由美子とよし子の親密さを下支えする存在として、家庭を壊した女は利用されるが、それが奄美大島からの移動労働者であることは興味深い。「大島人と言う或いは他国者と言うような矮小な考え方¹⁶」は、「大島人」や「他国者」と

が勝手に夫の親族の手にわたっていたり、また夫が妾とその子を正妻として届け出るなど、妻や娘たちの生活をゆさぶるケースが多く、婦連に相談に訪れる女性も多かった。1955 年 2 月 24 日、竹野光子を会長とする「沖縄民法改正申請委員会」が立法院へ請願書を提出。同年 12 月 28 日に本土新民法通りの法が成立後、1 年間の猶予期間において 1957 年 1 月 1 日から施行。『なは・女のあしあと 那覇女性史戦後編』（那覇市総務部女性室、2001 年）208 頁。

¹⁵ 1957 年 1 月 4 日、「ようやく妻たちも人間に昇格した」と竹野光子を先頭にした婦人会員たちはパレードや式典を大々的に行った。（同上）

¹⁶ 「1956 年評議員会議事録 共愛会」（沖縄愛楽園自治会所蔵）に付された注意書きの中の言葉。（引用は前掲『沖縄県ハンセン病証言集資料編』787-788 頁より。）1956 年 7 月 3 日の第 20 回緊急臨時評議員会では、全員一致で、ある「夫妻」の「強制送還を決定」した。注意書きは、このような「矮小な考え方」から彼らの「強制送還」を決定したのではないという文脈であえて書かれている。——「誤解を生じてならないことは、*氏が大島人と言う或は他国者と言うような矮小な考え方からでは決してないことである。その証拠には現に他の善良な大島の病友達は園内に於て相共に融け合って楽しく療養しているのを見ても自明であり、従って差別的待遇は我が園内に於ては皆無なることを公言し又これを誇りとするものである。」彼ら「夫妻」が「懲罰審議委員会」に提訴されたのは、その夫が「故郷沖永良部島」との「闇取引」や「社会の健康者某女」を「メカケ」同様にして自宅に住まわせたこと、またそれらの「悪事」が新聞に報道され他の「療友」たちに迷惑をかけたことによるものであった（妻は夫と「共謀共犯と断ぜられ同罪と決定された」）。初めは「普通送還という合法的話合」であったところから、「強」という字を付けてついに強制送還の挙に出づる外に手段なきこと認め」と「評議員」が決定するに至るまでの間、夫はあらゆる「拒否」を行っていた。例えば、希望する送還先（療養所）の二度の変更（奄美和光園→鹿児島敬愛園→奄美和光園）、「パスポートに添付する写真

¹¹ 荒井裕樹『隔離の文学——ハンセン病療養所の自己表現史』（書肆アルス、2011 年）306 頁。

¹² 『沖縄県ハンセン病証言集 資料編』（沖縄愛楽園自治会、2006 年）584 頁。

¹³ 荒井前掲書、313 頁。

¹⁴ 米施政権下の沖縄は、婦人参政権だけは日本本土より早く行使されたが、その後本土で新しく制定された新憲法（1947 年 5 月 3 日）も新民法（1948 年 1 月 1 日）も沖縄には適用されなかった。男女同権が叫ばれながら、女性たちは結婚すると家や夫の支配下におかれ、妻は相続権もなく、金銭の貸し借りの保証人にもなれず、いわゆる法的には無能力である、という旧民法下におかれていた。戦争で戸籍簿も消失したことも加わって、娘だけを生んだ戦争未亡人が夫の家族から追い出されたり、財産

いうカテゴリーの生産が先になければありえなかったにもかかわらず、「大島の女」はすでに、同時代の排他的雰囲気をも充分含んだものとしてテキスト内に流通している。

先に挙げた、山田みどり「ふるさと」と亀谷千鶴子「すみれ匂う」が、異なるタイプの女性を描き分けることによって「よりよい」女性の生き方の選択を読者に迫る際、作品内の女性同士は比較され、理解し合う契機が奪われていったように見えるが、「焼土の女」における「大島の女」も同様に、切り捨てられていく存在である。外出許可証を「オーバーのポケットに大事に仕舞いこ」み¹⁷、「はたの見る人の目に爰に思われはせんか」と、あるいは「通りの人から怪しまれること」に神経を使う由美子のその身体は、在留許可証の所持を義務付けられ、いつでも「送還可能」な状況に結びつけられた「大島の女」にも重なりつつ生きた可能性は描かれないままである。

2. 女たちの「安全な」親密さ

二人の女性の居場所である小屋から、峯井よし子の子どもが退けられていることは、病者である由美子が子どもたちによる「密告」を恐れる理由からであるが——「ライの宿命的、病気には先ず何より、子供が怖い。子供は何知らず近づいたり、普通人人と思っていて、或は、手足の変形的個所をみてにらみつける。そして正直に、親や他人に云い伝える。このような体験は、病人誰もが持っていることだった」〔38頁〕——、閉ざされた空間の中で互いの美しさに気づいていく女たちの姿に見られる親密さには、それが同性間の、生殖を行わ

ないがゆえに社会的に許容された“安全な”親密さと見過ごされそうになるただなかにおいて、未来へ希望的に投げかけられた紐帯のありかたをそこに読むことができるのもまた確かである。

「子供は母に預けたのよ、ゆっくりして、姉さん」と云いつつ、よし子は部屋に戻ってきた。パーマをきれいにした、よし子の長顔、誰の目にも三十才とは思えない、女性の若さが溢れ保持されていた。由美子は今、彼女の健康的な若さを、羨望していた。「由美子姐さんは病気のように見えず、美しいわね」と、よし子は云った。由美子には思いがけない、言葉を聞かされたようであつた。彼女よし子のお世辞でなく、初印象であろう〇、療養生活の予想以上に恵まれていることを察するよし子の言い分でもあつた。そう言われて由美子は、一応自分の考察している、肉体美の心理を素直に打ち明けて云った「人間は母体を生まれ出て、生涯をむしばまれず、保つていくところに真の美があり又、女の幸福があると思うの…」〔40頁〕

作品内の女性によって語られる「肉体美の心理」や「女の幸福」という言葉には、美しくまなざされたいという病者の欲望も底流をなしているだろう。二人の視線はぶつかり合うことなく、病者の由美子を捉えるよし子の視線や、そのようにして見られた由美子の容姿が描かれることはない。そこにはよし子がたしかに由美子を見た、という視線の痕跡が残るだけであるが、「健康的な若さ」を羨望させるその当人から「美しい」とまなざされた、という出来事には、相手の視線の中に自己を積極的に生かそうとする一瞬が描かれている。それは戦後も引き継がれた断種政策が証明するような国家による性の管理をすり抜けて、直接的な接触がなくとも、たしかに目で触れられたのだという痕跡である。

所有権の問題をいつとき保留した小屋の中で女たちが一晩語り明かすことを予期させつつ、夜を迎えるその手前で小説は閉じる。ところで、よし子は9歳から南洋群島で育ったという出自を持つ

撮影の拒否」、「手続き上使用せねばならない実印の借出し拒否」、そしてついには「大島えも日本えも何処えも絶対に行かない」と言い出し、「仮病を使って病棟に入室、ハンスト同様の手段に出た」、とその「拒否」の行為は事細かに記録されている。そして同年7月5日の晩に夫妻は園を「逃走脱出」し、「計上されていた22万円の輸送費はそっくりそのまま政府へ返上となった」（7月6日事務日誌）。9月17日の第29回定例評議員会では、和光園に彼らが「正式入園を許可された由」が報告されている。¹⁷ 前掲「患者の財産保護法の制定を望む」『愛楽』13号24頁より。作品には、「縦横三寸位の券に、本籍地、生年月日、氏名、帰省の理由等を書き入れ、鮮かに園長の朱印を捺してある証明書」〔35頁〕というように、外出証明書についてとそれが発行されるまでの検査を含めた手続きまでもが詳細に書き残されている。

が、テキストにおいては南洋も療養所も同じく「異郷」と名指されていることは興味深い（「そうすると、由美子姉さんが異郷に居て知らぬ間に、與昌が自分の所有地にしたということですか」〔39 頁〕、「よし子は異郷で成長してきた故か、他所の娘より気丈夫で寛大な心を持っていた」〔41 頁〕）。それはまた、「私、幼いころ南洋へ、父母に伴れられて行ったもんですから、戦前の故郷の人達、覚えていません。また、最近この辺の部落民は基地周辺から移住密集して来ましてね」〔39 頁〕というように、「戦前の故郷の人達」を覚えていない「異郷」から来た者同士が、他地域からの「移住密集」の流れの中で出会い、打ち解け合うという物語の理想化としても読める。その時、彼女たちに南洋と療養所を「異郷」と呼ばせる「故郷」沖縄という場は反転され、「異郷」を生みだす場として、もしくはそれじたい「異郷」として生きられた場として映し出されるだろう。

おわりに

テキストはハンセン病者のみでなく、「大島の女」という形で、1950 年代米軍統治下の沖縄において人びとの間に引かれた分断線を浮かび上がらせた。ここには分断線によって生産された者同士が、すれ違いつつ同じ時間を生きたことが辛うじて見える。またテキストは、女性に語らせることを通じて、療養所の内外の世界を周縁の立場からとらえ直し、結び付けた。しかし機関誌が届けられたであろう奄美の療養所和光園では、また、愛楽園の中にも居た「他の善良な大島の病友達¹⁸」には、作品はどう読まれたか、ということが気にかかる。

¹⁸ 前掲『沖縄県ハンセン病証言集 資料編』『1956 年評議員会議事録 共愛会』「註」、788 頁。